

# Academic Newsletter 第6号

## 特集: 2学期以降の取組 アカデミック・レクチャーより

### 目次:

### 英語特修RW

#### アカデミック・レクチャー

英語特修RW	1
歴史文化研究	1
日本文学研究	2
国語総合・総合国語Ⅰ	2
古典・古典鑑賞Ⅰ	2
現代文・総合国語Ⅱ	3
リーディング・英語理解	3
英語特修LS	4

RWの授業では、Even More True Storiesという外国で出版されたテキストを使用しており、今年は、そのテキストの内容に関連した御講演を大阪大学言語文化研究科の2名の先生方からいただきました。まず、9月に「同音異義語から意味の世界へ」と題して、沖田知子教授にお話を頂きました。テキストでは、似た音の語句から生じる誤解を扱いましたが、先生は「不思議の国のアリス」などの原書をもとに、その中で使われている同音異義語や多義語などの言葉遊びの世界をのぞかせて下

さいました。作者キャロルの絵手紙の解説などもあり、言葉の持つおもしろさに触れることができました。そして、11月は「日本における外来語・外来文化の創造的受容について」という講義題での、北村卓教授の御講演でした。テキストで扱った文化比較の分野に関連するもので、日本固有の文化と言われているものでも外国からの影響を受けている場合が多くあるということ、日本語の特性や、近現代文学、そして宝塚歌劇などを例に取りながらお話いただきました。新しい視点で日本の文化を見つめ直す良い機会となりました。



沖田知子先生の特別講義



北村 卓先生の特別講義

### 狂言の体験

### 歴史文化研究

普通科第Ⅱ類人文型人文社会コース及び京都こすもす科人文社会系統の選択科目「歴史文化研究」では、去る平成22年11月17日(水)の5・6限に京都府立大学文学部歴史学科教授中純夫先生をお招きして特別講義を実施しました。講義題は「墨家と儒家をめぐる論争」で、授業で学習した中国古代思想をより深める内容です。

今回の特別講義では、中先生の御提案で大学の講義と同じ形式で実施されました。まず、原典を読解し、その意味するところを先生の御指導の下で解釈していく、と

いうものです。生徒たちには馴染みのない形式の講義で、はじめはやや戸惑ったようですが、先生の丁寧な御指導で原典の解釈が進むにつれて、生徒たちも熱心に講義に取り組みました。

授業で学習した以上に墨家、儒家の思想の本質を深く学び、両者の論争を大変興味深く学習することができました。

いずれにしても、忠実に原典に当たりながら地道に参考文献や資料を使いながら解釈を深めていく、文系の研究のあり方に触れられた貴重な講義でした。

## 日本文学研究



山本淳子先生の特別講義

9月29日(水)に、京都学園大学の山本淳子教授より、皇族を離れた光源氏の敗者復活の物語としての『源氏物語』を、その背景であった平安時代の摂関政治の解説を交えてわかりやすく講義していただきました。「超人的恋愛力」を武器に過酷な貴族社会を生き抜いた光源氏の生涯に触れ、生徒は普段の古典の授業とは異なった視点から古典文学に親むことができました。また10月13日(水)には、同じく山本淳子教授に引率していただ

き、大覚寺でフィールドワークを実施しました。平安時代の面影を今に伝える宸殿で、建物内での貴人の振る舞いを山本教授に実際に再現していただくことによって、当時の貴族がどのような生活を送っていたかを詳しく理解し、学習を深めることができました。生徒にとってこの2日間は、日本文学の源流である古典に対する知的好奇心を大いに触発され、豊かな感性を育む体験となりました。

## 国語総合, 総合国語 I



森山先生と共に「蛍の光」を歌う生徒たち

国語総合・総合国語 I (3~6組)の授業では、平成22年12月14日(火)の3・4限に京都教育大学教授の森山卓郎先生をお招きし、特別講義を実施しました。「言葉から文学を考える」という講義題で、普段何気なく使っている言葉を通して日本語のおもしろさや奥深さを考える内容です。

今回の講義では、「おはよう」「こんばんは」という挨拶や、「蛍の光」の歌詞、金子みすずや萩原朔太郎の詩など、生徒の身近にある言葉や作品を用いて、わかりやすくお話いただき

ました。生徒たちは、助詞一字の違いで全く違う印象になる日本語表現の不思議や、活用形によるニュアンスの違いなど、いままで気づかずにいた日本語の奥深さを発見し、二時間の講義はあっという間に終わりました。表現を深く味わい、コミュニケーション能力を磨くためには、文法を正しく理解しなければならないことに気づき、日本語への意識が高まったようでした。私たちの母国語である日本語の奥深さを理解するよい機会となりました。

## 古典, 古典鑑賞 I

古典、古典鑑賞 I では、11月4日、3・4限に同志社女子大学名誉教授の隴谷寿先生をお迎えして、「摂関家と女流作家の環境」と題した講義をしていただきました。

授業で触れる『枕草子』『源氏物語』など、有名な作品を遺し、歌人としての評価も受けている女流作家らが、どのような身分の者たちで、どのようにして王朝文学を生み出すに至ったか、彼女らのおかれた環境をわかりやすくお話してくださいました。その中で、いまや世界中で25カ国語に翻訳されている『源氏物語』でさえ自筆本は残っていないことや、皇族に生まれても、一定水準の生活の維持が

可能な人数を超えると臣下に下される「皇族賜姓」のことなど、意外な発見も多くあったようです。

また、お話は彼女らの出身階級の「受領」に及び、当時の「受領」の実態を『今昔物語集』を題材に紹介してくださり、古典作品をもとに、人々の様子や暮らしを読み解く面白さまでも伝わってきました。

講義のとき鑑賞した、「受領」の暮らしを紹介したビデオに若き日の隴谷先生が登場されて、会場が少しざわめきつつ雰囲気が和むという場面もあり、楽しく貴重な時間となりました。

## 現代文, 総合国語 II

現代文・総合国語Ⅱ（3～6組）の授業では、平成22年12月16日（木）に京都産業大学・生命科学部教授の永田和宏先生に「歌を読む楽しみ・歌を詠む楽しみ」という講義題で特別講義をしていただきました。永田先生は科学者であり、また、短歌結社「塔」を主催される歌人でもいらっしゃいます。また、嵯峨野高校の卒業生でもあります。

講義の内容は三部構成でした。第一部は、与謝野晶子や寺山修司、またご自身の短歌など約四十首の歌をわかりやすく解説して下さいました。視点のおもしろさやことばの響き、歌の持つ力等にも言及しながら、大変わかりやすく解説して下さいました。

第二部は、生徒の詠んだ短歌の中から、永田先生が選んで下さった歌についての講評をいただきました。自分たちの仲間が詠んだ歌ということもあり、生徒たちは興味深く聞き入っていました。

最後は、昨年8月に亡くなられた、永田先生の奥様であり、歌人でもいらっしゃる河野裕子さんを悼むエッセーを朗読して下さいました。奥様への愛情あふれる、あたたかくも悲しい朗読に生徒たちは心打たれていました。ところどころに織り交ぜられた短歌は効果的で、歌の持つ力を生徒たちは体感していました。

短歌の素晴らしさ、奥深さに触れるよい機会となりました。

冬の日のプールサイドに  
寝ころんで電気を消すと  
こんなにも星！

コンクリート  
たそがれの混凝土の  
今の古都 ビルの上にも  
鶴の鳴く声

～生徒作品より～

## リーディング, 英語理解

毎年非常に好評で、恒例になっている京都外国語大学の倉田誠教授による御講演は、今年度は、3年生3～6組を対象に、昨年12月8日にコモンホールで行われました。先生の御講演がなぜ大好評なのか？以下はその理由です。

- (1) 英米の映画を簡潔な解説付きでたくさん見せてもらえる。
- (2) その中にちりばめられた英語表現を、使われる状況とともに学ぶことができる。
- (3) 普段難しく表現していたり、すぐに思いつかないような表現が、簡単明快な英語で表せることに驚かされる。
- (4) 学んだ表現を、講演中に生徒同士でテンポよく言えるようになるまで口に出して練習する機会がある。
- (5) 英語の発音がとびきりネイティブライクなので、魅了される。
- (6) 話しのテンポが小気味よく、笑いが絶えない。
- (7) 講演中も生徒とのコミュニケーションを忘れない。
- (8) 華麗な話しぶりの中にも、英語習得に対する圧倒的な情熱と研究に対する飽くなき探求心を感じ取ることができ、生徒の学習意欲を改めて喚起させる。
- (9) 人間通である。

ここでひとつ倉田先生の御講演の中から問題を出してみましょう。次の日本語をあなたは英語でどう表現しますか？  
「今回は見逃してやるが、もう二度とするなよ。」

先生によれば、日本人の典型的な英訳は次のようになります。

**I will overlook your mistake this time, but don't do it again.**

これに対して、"Let A go"（Aは任意の目的語）という表現を使いなさい、というのが倉田先生のアドバイスです。つまり、次のようになります。

**I'll let you go this time, but don't do it again.**

・・・あなたも講演を聞いてみたくなりましたか？



▲  
特別講義の様子  
▼



## 英語特修LS

今年度もインターグループから現役の通訳者であり、指導もされている2人の講師の先生をお迎えしての特別講義を3回シリーズで行いました。今回は、2010年8月、東京・六本木で開かれた、ハーバード大学教授マイケル・サンデル氏による『日本で「正義」の話をしよう』の特別講義を題材にとりました。通訳養成の現場のノウハウをふんだんに盛り込みながらの特別講義は、生徒にとっても有益で非常に密度の濃いものとなりました。話題沸騰のサンデル教授の生の英語を聞き、それを英語⇄日本語に通訳したり、内容を考えたりし、また、講師の先生方の通訳現場での体験談等もお聞きすることができて、非常に有意義な講義でした。

## 狂言を体験しました！

昨年度から始めた、狂言を実際に演じる取組を、今年度は参加者を公募し、放課後や休日にみっちり稽古するというやり方で行いました。

二年生一人・一年生五人が参加し、三人一組で狂言「口真似」を習いました。これは、客への応対について主人の口真似をするよう命じられた太郎冠者が、過度なまでに真似をして主人と客を困らせる話です。

茂山狂言会から茂山正邦先生はじめ四人の先生方に、六回にわたってお越しいただき、台詞まわしや足運び、三人が絡むクライマックスの動きなど、熱心に教えていただきました。

最後に京都府次世代総合文化祭の舞台上で二組が発表し、いきいきと演じることができました（十二月十八日、向日市民会館）。

参加生徒の一人は、「人前で発表するときは、いつも緊張しすぎて思いどおりにできなかつたのですが、今回はそれがなく、とても大胆な演技ができた気がします。それがとてもうれしく、強い自信が持てるようになりました。」という趣旨の感想を述べています。



▲  
舞台発表の様子  
▼

